

「グリーンランドの捕鯨」

本多俊和（元放送大学）

グリーンランドでは、捕鯨とクジラ産物利用は 4000 年前から今日につづいているが、その様子が歴史的に移り変わっている。捕鯨、つまり座礁クジラや寄りクジラではなく、海上で生きたクジラを仕留める漁法はいつの時代にまで遡るかについて、最近開発された古環境 DNA 分析法の成果を踏まえて論考する。18 世紀の民族誌にある情報を用いて当時の捕獲法（技術）を想定して復元を試みた上で、最後に現代のグリーンランドにおいて捕鯨の文化的、社会的、経済的な意義を略述する。依然としてクジラは重要な食料であると認めつつ、全国に流通する鯨肉の販売実績を参考に鯨肉の消費について考察する。その問題に関連して、捕鯨（クジラ産物利用）はその経済的に重要であると同時にグリーンランダー（Kalaallit）にとって文化的な役割、すなわちエスニック・アイデンティティーの意義が強調されている一方、20 世紀初旬までは記録されている捕鯨および鯨肉などに関連する多くの儀礼的な現象は現代ほぼなくなっているという矛盾について考える。